瑞岩寺報

2015.01.01
（平成27年 睦月）
【正月号】

お正月総合案内

お正月ご祈祷（きとう）法要

お正月は毎日、天地が招福除災を祈念する大般若ご祈祷を勤行します。

お正月は前年の悪を反省し、新たな年の誓いを立てる、年初めにふさわしい行事です。

ご祈祷は左記の通り行われます。

厄年厄除・病気平癒・交通安全・良縁成就・開運厄除・家内安全・無事成就・商売繁盛・学業成就・試験合格などのご祈祷のお申し込みは同封の申込書をお寺まで持参されるか、ファックス（37―5535）してください。

【期　日】1月元旦（木）
1月2日（金）
1月3日（土）

【時　間】
午前9時・10時・11時～
午後1時・2時・3時～の6回
◎ご祈祷可能です。

【ご祈祷料】
ご祈祷紙札（小）　3、000円
ご祈祷木札（中）　5、000円
ご祈祷木札（大）　10、000円
ご祈祷木札（特大）　20、000円

【お願い】
一、お願い毎は二つまでにしてください。
一、ご祈祷札にはお守りがつきます。
一、法要後、ご祈祷札をお持ちください。
一、法要にはなるべく本人がご参加ください。
一、希望の方には郵送しますので申し込み書にお書き下さい。

年始参詣

【期　日】1月元旦～3日
【時　間】午前7時頃～午後5時まで

※本堂にて新年の挨拶をされた方に、瑞岩寺の新年祈祷札と平成27年度本山カレンダーをさしあげます。是非、皆様お揃いで気軽にお出かけ下さい。

お墓そうじ　瑞岩寺にお墓のある方へのご案内です

【期　日】12月28日（日）
【時　間】午前7時から

お正月が近づいてきました。お墓のお掃除をしましょう。この暮のうちに仏壇をきれいにして鏡餅を供え、お花を飾り準備を整え、元旦早朝、若水を汲み供え、一家そろって仏壇に手を合わせ、よき新年をお迎えになることは、私たちの善行の始まりだと思います。さらに、お寺に参拝してご先祖様に感謝の誓いを祈ることこそ意義深い初詣でになると思います。一斉お墓掃除を右記のごとく行います。たまには早起きしてお墓掃除も気持ちいいものです。お子さんやお孫さんといっしょにどうぞ。

◆強制ではありません。また、上記以外の日や時間も受け付けております。
◆自分のお墓の掃除が終ったら、通路など共有の場所のお掃除も積極的にお願いします。
◆遠方の方はお寺でやっておきますのでご安心ください。
◆飲み物はお寺で用意してあります。

Attention!!　以下の点ご留意ください。

お祈祷法要について

お祈祷札について、申込書を持参、またはファックスしてください。
※ご祈祷料の振込用紙を同封します。
市内・県内外の方は同封の振込用紙をお使いください。
※ホームページからダウンロードできます。

厄年早見表

◇からだの変わり目◇

	後厄	本厄	前厄
男の大厄 42歳	昭和48年	昭和49年	昭和50年
女の小厄 37歳	昭和53年	昭和54年	昭和55年
女の大厄 33歳	昭和57年	昭和58年	昭和59年
男25歳の厄年	平成2年	平成3年	平成4年
女19歳の厄年	平成8年	平成9年	平成10年
幼児4歳の厄年	平成23年	平成24年	平成25年
男女61歳の厄年	昭和28年	昭和29年	昭和30年
13歳詣り	男女 平成15年		

聖学院大学学長
東京大学名誉教授

姜尚中さん インタビュー

カン・サンジュン
Kang Sang-jung

住職
今回は、どうもありがとうございます。来年、瑞岩寺の寺子屋講座にご登壇いただくに先立ち、こうして先生のお話をうかがう時間をいただけて光栄です。どうぞよろしくお願いします。

姜
はい。どうぞよろしくお願いします。

住職
先生は、現在、聖学院大学の学長を務めていらっしゃいます。今日、初めて大学の学長室におうかがいしましたが、とてもきれいなキャンパスですね。キリスト教系の場所ですから、僧侶の私はなんとなく少し足を踏み入れにくい感じがしましたが（笑）。

姜
そうですか？　そんなことはないですよ（笑）。

住職
早速ですが、先生は東京大学を退職されて、こちらの大学に移られたのですよね？　そのきっかけからうかがってよろしいでしょうか？

姜
個人的には、家庭に起きた不幸も要因の一つでしたけれど、やはり、東日本大震災を体験したことが大きかったですね。

住職
息子さんが亡くなられたご心痛、お察しいたします。そして、東日本大震災も本当に大変なことでした。

姜
私は昭和25年生まれなんですが、我々の世代というのは高度成長期に物心がついて、日本社会がどんどんよくなっていくのを体感しながら育ったんですね。思春期から中年に至るまで、日本の長い歴史の中のとてもいい時代を過ごしてきたと思うわけです。少なくとも日本列島、沖縄とかの一部の地域を除けば、「明日は今日よりいいはずだし、今日は昨日よりもいいはずだ」と、素朴に信じることができたんです。

ところが東日本大震災が起きて、鴨長明の『方丈記』ではないですが、やはり「無常」ということを感じました。繁栄、豊かさ、成長、右肩上がりが習い性のようになっていたことを、改めて問われているような気がしたんです。

住職
私も東日本大震災のあとに南三陸などにボランティアで行かせてもらいました。和尚さんも含め、すべてが流されてしまったお寺もあって、まだまだ支援が必要だと感じています。

震災で感じられた「無常」の感覚が、先生に影響を与えられたのですね。

姜
そうですね。自分は還暦を超え、こういう状況の日本で何をどうすればいいのかを考えたとき、「人をつくる」ということに行き着いたんです。

人づくりとは、広い意味での教育です。自分の残された時間とエネルギーは、そこに割くべきじゃないかと思いました。

住職
東大でなく、聖学院大学を選ばれたのはなぜだったのでしょう？

姜
東大というところは、そのままにしていても、ある程度までは行ける学生たちが多いんです。この大学に移ったのは、そうした学生たちではなく、かなり悩んだりいろいろなものを背負ったりしている若者たちのいるところのほうがいいと考えたからです。

住職
先生の著書、『悩む力』を読ませていただきました。本の中で先生は「悩み」を手放さず、持ち続けることで強くなるとおっしゃっていましたが、最近の学生さんたちも悩んでいるのでしょうか？

姜
最近、少し目立つのは「なんとなく」という感覚の学生たちですね。なんとなく生きて、なんとなく大学に通い、なんとなく卒業して、なんとなく就職していく。そんな学生たちに目がいきます。

住職
「なんとなく」というと、あまり悩んでいる実感がないように感じますね。

姜
悩みを自覚している学生であれば、その先に光が見いだせるかもしれません。痛さや苦しさを強く意識していると、なんらかのリアクションが出てくるわけですね。ところが、こうした若

者からはリアクションがあまり出てきません。やはり「生きている」という実感が乏しいのではないかと思うんです。

私は、夏目漱石が好きでよく読むのですが、彼の小説に出てくる主人公には、今の学生に通じるところがあるように思います。風呂に入って自分の体を見ていたら、あるときふと自分の足が胴体から生えていることが異様に思えた。やがて、それをずっと見ていると、そこに無様な格好で自分の足が横たわっていることを不気味に思った……こういった表現があるのですが、これは、生きている実感が薄いということだと思います。

住職　確かに、どこか人ごとのように見ている表現です。

姜　悩むのは、どこかに生きたいという気持ちがあるから悩むわけですよ。ところが今は、それがなかなか見えない。枯れていると思える学生たちが結構いますね。これをどうするかだと思います。

私としては、彼らが生きているという喜びをどう実感できるか、そういう芽を自分でどう作っていくかが問題だと思っています。

住職　なるほど。それは先生が著書の中でおっしゃっていた「未来を生きている子どもが多い」ということと関係がありますか？　たとえば、いい幼稚園、いい学校、そしていい大学に行き、就職、結婚、子どもを産んで、いい老後……みたいな。まさに「今」がないということとも関わりがあるでしょうか？

姜　おそらく関係しているでしょう。ただし、「未来に生きる」感覚は、いわゆる学校エリートほど強いと思います。聖学院に来るのは、そうでない学生が比較的多いですね。なんとなく、そういうものに乗り遅れた、あるいは、どこか自分に合わないと感じているけれども、かといって強い抵抗をするわけでもなく、やっぱり大学には入らなくてはいけないと考える。そういう学生が全体の何分の1かはいるんじゃないかと思います。

最近、そういう学生たちは、メディアから落ちこぼれているんじゃないかと感じています。

住職　一般のメディアから、落ちこぼれていると？

姜　一般のメディアは、競争力があり、夢のある若者たちを「グローバル〇〇」などと取り上げたり、また一方では、おぞましいような犯罪とかで特集をしたりすることがありますが、大抵の若者はその中間で、グレーゾーンの中にいて目立たない。良くも悪くも目立たない。ドラマのない人生を生きているんじゃないかと思うんです。そういう若者からすると、メディアに取り上げられるようなドラマのある人たちは、ある一面、眩しく見えるのではないでしょうかね。

住職　瑞岩寺でも、「寺子屋ライブ」というものを毎年やっていまして、いろんなボランティアの方に協力してもらって三千個のロウソクを境内に並べるんですが、参加者の中には、いわゆる引きこもりやニートの若者もたくさんいます。彼、彼女たちは、一対一で向き合うととてもいい子たちなんです。ただ、今の社会にうまく適応できないというか、そういうことを感じますね。

先生は『心』という小説の中で、スキューバーダイビングで震災の海からご遺体を助けたという若者のことを書いていらっしゃいますが、こちらの学校に実在のモデルがいるそうですね？

彼などは、ドラマのない若者とは違うように思います。

姜　彼の場合、天性のものなのでしょうね。生きることに対してすごく前向きなものがあると思います。彼は自分のことを、凡庸で、ガリ勉をしていい大学に入るような思考もなかったと言いますが、しかし、好きなものがあったわけです。それは海で、どうしてもライフセーバーになりたくて、ハワイまでライセンスを取りに行ったんですよ。この大学ではあまり勉強はしなかったと言っていましたけれど、苦手な英語も一生懸命がんばってライセンスを取得したんですね。

そして、帰国後はアウトドア系の会社に非正規雇用で雇われたのですが、ボランティアとして小学生を対象にした野外活動をしていたときに、東日本大震災が起きたんです。彼は、「自分にできるのはライフセービングしかないから、行きたい」といって、被災地に赴いた。ほぼここに書いたとおり、だいたいが事実です。もちろん彼がどう思ったのかは、私が想像で書いたわけですが、やっぱり最初はご遺体と接触もできなくて苦しかったと言っていましたね。

住職　確かに彼の目にした光景は、すごいものだったのでしょうね。

姜　ただ、私が心を打たれたのは、彼が人間愛だとか、何々だとかと大それた大義を持ち出して被災地へ行ったのではなく、「自分はこれしかないから、困っている人がいるから行く」ということですね。これはね、私たちのよう

な戦後世代になかったものだと思います。

私たちの世代は、何をするにしてもすぐに理屈をつけたがるんです。何かと理屈をつけて、「こういう大義があるから、これをやるべきだ」とか、「だからやるべきではない」とかね。でも、彼はそうじゃなくて、「困った人がいる。自分はこれしかできない。これしかできないけど、これでやろう」と、自分で決めたら、個人ですっと動くわけです。そして、大変な体験をしても吹聴するでもなく、ある意味、淡々としている。それがすごいと思いますね。

もちろん、淡々として見える裏側では、やっぱり精神的に参っていたと思いますよ。かなりトラウマがあって、病院に通わざるを得なかったんですね。本に書いたとおり、彼は薬の力を借りずにもとに戻りましたけれども。

住職　それはよかった。私もハワイで開教師をしていた時に、何度か事故のご遺体を前にお経をあげてほしいと頼まれたことがあって、目にした光景は、やはり心に残ります。

姜　そうでしたか、凄惨なものなのでしょうね。

住職　普通のご遺体の状態ではないですから。その後しばらく食事ができなくなりますね。

姜　彼の場合も、ずっと食事ができずに大変だったと思います。まだ24、25歳でしたからね。私はそのことに触れ、日本社会に彼のような青年がいるということから教わるものが大きかったですね。

今、震災を経験した私たちが考えなければいけないのは、そこから何を汲み出していくかだと思うんですよ。成長することだけをみんなで標榜するような時代はもう終わったんじゃないか。もう少ししっとりとした心で日常生活が送れるような、そういう時代にならざるを得ないのではないかと直感的に感じました。

住職　先ほどおっしゃっていたような、右肩上がりの時代ではないということですよね。もっと心を見ると言いますか……。メディアの氾濫も、ある意味、心を育てる妨げになっているようにも思います。

私は普段あまりテレビを見ないんですが、見ていると脳が影響を受け過ぎてしまうんですね。永平寺での修行時代は外界からの情報が入ってこないですし、周囲から聞こえるのは、川の流れる音と鳥の声だけです。皆さん「厳しい修行で大変でしたね」とおっしゃるんですが、私にとってはあれほどいい場所はなかったです。世間に戻ってみると、いろんな情報が入って来てかえって息苦しく感じます。

姜　私も『心の力』を書いたときに、人間が自由で、欲望があって、その欲望を満たすものが多様、豊富であればあるほど苦悩も深くなって、すると、どうしてもシンプルな生き方がしづらくなる。シンプルに生きることが苦行に思えてしまうと思ったんです。私もその感性が抜け切れていませんけれども、やはり東日本大震災を経て、「変わらなければいけない」という気持ちが実感として湧いて来ましたよね。

住職　欲を満たす選択肢が多いほど、息苦しいというか、かえって窮屈になるものですね。私は毎朝5時に坐禅をするんですが、そのときのほうが心は解放され、穏やかな気持ちになります。

姜　戦後日本は、自由というものをどう獲得しようかとみんなで標榜してきたわけですが、いざ手中にしてみると、実はあまり幸福なものでなかったことに気づき始めたんですね。自由であることは、本当に人間にとって幸せなことなのかと。もちろん、選択肢のある人たちだけでなく、全くないという人もいますけれど、いずれにせよ、自分が今生きているという実感を高らかにうたえない人が増えていることは間違えないですね。

住職　多分、生まれたときからゲームやテレビ、スマートフォンなどのリアリティのない世界がまわりにあるからでしょうか。

姜　そうでしょうね。これまでの自分の魂が打ち砕かれるという体験がないまま過ごしているんです。砕かれて初めて違うものが見えてくると思うのですが、そういうことを味わわずに全てがダラダラと続いていってしまう。

ちょうど、その季節にしか食べられなかったものを1年中食べるようになったら、すっかり季節感がなくなってしまったような感じですよ。

住職　そうですね。確かに昔は食べるもので季節感がありました。

姜　毎晩灯があって明るいけれど、いつが昼でいつが夜なのかもわからない。そういう状態だとも言えますね。

住職　だから、生き方が「なんとなく」になってしまうと。

姜　闇が深ければ光も明るく感じますよね。今の世の中は光と闇が曖昧になっていて、その中でなにやら死んだように生きているというかね、「これが生きているということだ」という感覚もなく、ただなんとなく1年がすぎていくようなイメージが若者の中に一部あると思います。

住職　先生は、そういう若者に対してこれからどのように指導しようと考えておられるのですか？

姜　今の若者は、出会いが希薄になっていると感じています。何かに出会い、「あ、そうか。そういうことだったのか」と自分の体の中から出てくるような体験が、残念ながらあまりないのです。

住職　世の中にこれだけ多くの出会いのツールがあるにもかかわらずですか？

姜　確かに出会いの可能性は無限にあるように思えるのですが、実際の出会いというのはほとんどありません。それはなぜかと考えると、やはり情報が進みすぎて、彼らは「未知数がなくなった」と思ってしまっているからなんです。

住職　先人がみなやってしまって、自分たちのできることがないと？

姜　たとえば、情報端末にキーワードを入れて検索すれば、ほとんどの情報は出てきますよね。それで彼らは、すべてが既知数になったように「錯覚」してしまって、新鮮な感動ができなくなっているのです。

住職　体験する前から感動がなくなってしまっているんですね。

姜　私たちの時代は、やっぱり未知数が多かったですよね。自分たちの知っていることなど、たいしたことはないんじゃないかと思っていました。だから、たとえ死にたいという思いがふっと湧いても、もしかしたらもっと未知なものと遭遇できるという気持ちが思いとどまらせたんです。そして、それは自分の知らない自分との出会いでもあったと思います。

　ところが、今の若者はいろいろな情報を感覚的には取り込めるのですが、実際に生身の人間との出会いがどうかと聞くと、非常に希薄なんですね。私としては、人との出会いを大学で学んで欲しいと思っています。

本を読むこともそうだと思うんです。私はすでに亡くなっている夏目漱石という人と本で出会っているわけですから。ここはキリスト教系の大学ですから聖書でもいいし、なんなら般若心経でもいいんです。1冊の本との出会いを、また、人との出会いをしてほしい。出会うということが生きることだと思いますし、それを学生にも伝えています。彼らに未知なるものとの出会いに臆病になってほしくないんです。そうすることで、自分が生きるに値するという感覚を持っていてほしいと思っています。

住職　なるほど。曹洞宗では師匠というものを探し歩くのですが、先生のおっしゃる人との出会いに似ているかもしれません。修行僧のことを「雲水」と呼ぶのですが、流れる雲の如く、水の如くという意味なんですね。水は四角い器に入れれば四角くなるし、丸い器に入れれば丸くなる。いろいろな学びがあります。

　私も永平寺とかハワイのお寺とか、様々な場所に行き、様々な方にお会いすることで、自分が開眼するというか、多くの気づきや学びをいただいてきました。今回、先生と直接お目にかかることでも、ご著書から汲み取れずにいることが、さらに学べるとワクワクしていました。1時間ほどのお時間ですが、たくさんのことを教えていただきました。

姜　いえいえ、そんなことはないですよ。私なりにいろいろな体験を経てきても、高みに立たれた方からすれば、まだまだ若造です。そんな私ですけれども、今後は若い人たちとの対話に、自分の残されたものを費やしたいと思っています。

　この年齢になると、大体十人くらいはまわりで亡くなっていますよね。自分の父母、息子も含めて、友人たちも十人くらいはいます。そういった人たちを見送る体験をしながら、少しずつ前に進んでいるのです。そのことを意識しながら、大事に生きて行きたいと思いますね。

　キリスト教の旧約聖書にも、「生きるということは風をつかむようなものだ」とあるのですが、これは、ある種の無常感につながるものがあると思います。この世のわざというのは常ならざるもので、それ自体に価値があるとは思えないという見方は、キリスト教と仏教の中でどこか通底していると感じるんです。

住職　そうですね、仏教の教えにも「諸行無常」と言います。

姜　だからこそ、1日、1秒をちゃんと生きていこうと思いますし、今は、若者に何を相続していけるんだろうかと

考えています。

夏目漱石は、熊本の高校で英語を教えていたんですね。彼も教育者としていろいろ悩んだと思うのですが、私が彼から一つ学んだことは、血縁やいろいろな縁を超えて、古い世代から新しい世代に、ある種の魂の相続みたいなものがなされているんですね。それを彼は小説として書いています。

私もこうして下手な小説を書いたときに、私という人間ともうひとりの〝主人公〟とで、世代を超えて何かを伝えられるといいますか、それが広い意味での教育になるのではないかと思っています。これは、「伝える」という相続ですよね。

私たち凡人は、どうしても血縁関係があるから親子、血縁というところに特別の価値を置いてしまいがちですが、実は、なんの血縁関係や利害関係もなくても、人の縁ができあがります。そこで何を伝えていくか、何を相続していくかを考えますね。ちなみに、漱石が教えていた高校は、私の母校でもあります。そんな縁もなにか影響しているかもしれませんね。

住職

仏教では、「諸法無我」。すべてが繋がっていると考えます。人と人、人とものとの縁は、血縁や利害関係だけでないというのは、とてもよく理解できますね。

姜

そして、今は私が伝えますが、それを受け取ってくれる学生がいれば、その学生はまた次に伝えていくだろうと。そうすると、1人の人間の寿命が終わっても、伝えて受け取り、受け取り伝えていくことで、「命」というのは大河のように続いていくんじゃないかと思うんです。その流れの一つに今の私はいるんですよ。流れはいつか流域の中に消えていくけれど、その先もまた流れていくという感じですね。自分をそういう存在なんだと見ていくと、最近はとても気持ちに張りが出てきました。「これでやろう」というふうに。学生や教員たちからも、「最近、先生ちょっと力強くなったんじゃないですか」なんて言われています。

住職

そうですか。それはいいですね。

姜

やっぱり伝えるところに私の使命があるかなと。今日、長谷川さんとこうして話していることもその一つなんだと思います。

住職

伝えるという使命ですか。私もそういう気持ちでこの仕事をしていると思っているんです。実は、私ごとですが数年前に離婚を経験しまして、今、子どもと一緒に住んでいないんです。そのときは死にたいくらい辛かったんですよね。でも、いま考えると、あの経験があったからこそ、今の僕があるなと。人生の中で大切な経験をさせてもらったと思っています。乗り越えることが非常に大変でしたけれども、やはり大切に生きようという気持ちが強くなったと思います。私は息子と暮らせなくなっただけで、これほど辛かったのですから、息子さんを亡くされた先生の辛さはどれほどのものだったろうかと思います。

姜

本当に、世の中で何が一番の不幸かというと、子に先立たれる親ほど辛いものはないですよ。ですから、長谷川さんがお子さんと一緒にいられないという辛さもよくわかります。ただ、だからこそ、いつか息子のところに行くまでは、自分に残されたものを生き抜こうというか、それが大きな「命」の流れに通じていっていると思うんです。

息子のことも、私が『心』という小説を書いたことで、たとえ虚構であっても、彼は人々の中に生きていくと思うんですね。以前のサイン会で、85歳のおばあちゃん、43歳のお母さん、小学校6年生のお子さん一緒にみえて、お子さんに「こんな難しい本を読むの？」と聞いたら、「ええ、時々辞書を引きながら読みました」と言ってくれたんです。そうか、もし明日私が死んだとしても、この3人は憶えていてくれる。きっと次の世代にこの話を伝えてくれるだろうと思いました。人はある限られた人生しか生きられないし、個体としてはそこで終わりだけれど、命は受け継がれていく。そういう実感を持ったんです。

ですから長谷川さんがポッドキャストの番組を作られたり、寺報を出されたり、いろいろされるということは、やはり相続を確実にしていくということでしょうね。時代も社会も、根本的にはそれほど変わらないでしょうが、思いを持った人はいる。そういう人たちに伝えていくしかないだろうと感じながら、日々生活をしています。

住職

そうですね。私たち曹洞宗では使いませんが、臨済宗の公案（禅問答の問題）に「父母未生以前の本来の面目如何（お父さんお母さんが生まれる以前のお前はどこにいるのだ）」というものがあって、とても面白いと思ったんです。公案ですから答えは一つではないでしょうが、私はやはり「命」の流れのどこかにあるんだろう、目には見えないけれどもどこかにあって、それが答えではないかという気がしています。

姜

その通りです、漱石は円覚寺でその公案を問われて答えられなかったんです。彼が26歳の時ですね。彼は神経症でしたし、答えられなかった。でも、彼の『門』という小説の中で、主人公がその公案を問われて門から出てくる

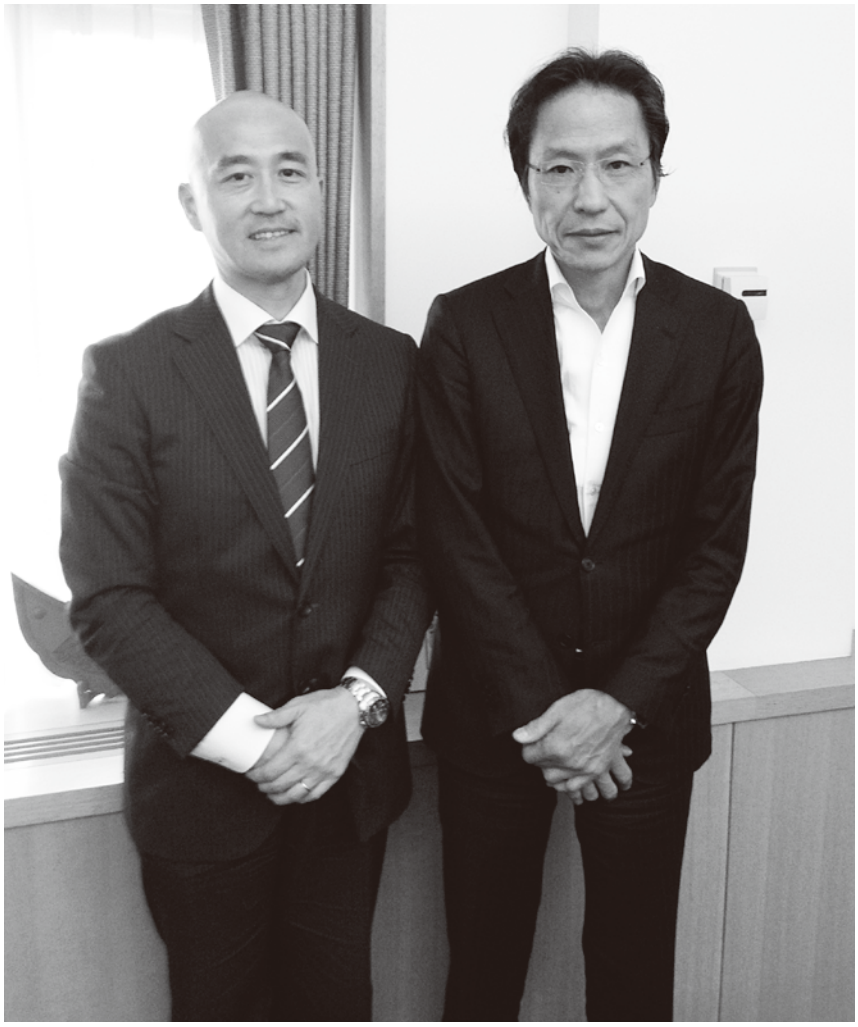
場面があるんですが、この小説を書いたときには分かっていたと思います。多分「命」だと思います。そして、「父母未生以前の……」という公案を彼なりに小説化しているんですね。

住職
すばらしいですね。

姜
私も、それは「命」だという回答を今は得ています。「命」です。私は「命」を尊ばない宗教は宗教ではないと思っているんです。もちろん、考え方によってそれをどう説明し、どこを目指すかの違いはありますけれども。本当に、最近そう思うようになりました。

住職
そうですね。宗教の「宗」という字は、大切なものという意味らしいですから、「命」と通ずるものがあると思います。

最後に、3月7日の寺子屋講演会で、先生に『心の力』という題でご講演いただくのですが、参加される皆さんにひと言いただけませんでしょうか？



姜
そうですね。「心の時代」ということでしょうか。

つい最近まで、脳科学などに関するものが皆さんにとても受け入れられていたと思うんですね。「脳がわかれば全てがわかる」というような感じで。もちろん脳科学は立派な一つの科学だと思うんですが、東日本大震災以降は、急速に露出が減って来たように思いませんか？

住職
そうですね。最近あまり見ないかもしれません。

姜
それは皆さんの関心が脳から心に移っているのだと思います。目に見えないものといっても、単にスピリチュアルなお話ということではないですよ。それは、「可視化されたものだけに価値がある」のではなくて、「目に見えないものに人が少しずつ価値を見出そうとしてきている」ということ。私はそこに望みを託しているんです。そういう意味で今は「心の時代」だと思いますし、講演では「心の力」ということを皆さんにお伝えしたいと思っています。

住職
ありがとうございます。3月のご講演が今から楽しみです。

プロフィール
姜 尚中（カン・サンジュン）
1950年、熊本県熊本市に生まれる。国際基督教大学准教授、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授などを経て、現在聖学院大学学長、東京大学名誉教授。
専攻は政治学、政治思想史。テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍。
主な著書に『マックス・ウェーバーと近代』、『オリエンタリズムの彼方へ』、『ナショナリズム』、『東北アジア共同の家をめざして』、『増補版日朝関係の克服』、『在日』、『姜尚中の政治学入門』、『ニッポン・サバイバル』、『愛国の作法』、『悩む力』、『リーダーは半歩前を歩け』、『あなたは誰？私はここにいる』など。
共著に『グローバル化の遠近法』、『ナショナリズムの克服』、『デモクラシーの冒険』、『戦争の世紀を超えて』、『大日本・満州帝国の遺産』など。編著に『在日一世の記憶』など。
小説『母ーオモニー』、『心』を刊行。最新刊『心の力』。

お礼の言葉

瑞岩寺26世大光昭雄大和尚の葬儀ならびに告別式に際しまして、ご縁の深い多くの檀信徒みなさまにお見送りいただきましたことを衷心より感謝申し上げます。

私どもにとりましては、かけがえのない先代住職を失いまして、今なお夢を見ているような気がしております。あの飄々としながらも笑顔を絶やさないご尊顔を再び拝することができないかと思うと淋しさが募って参ります。

思えば、昭雄大和尚は瑞岩寺の興隆と宗門の発展、毛里田保育園の発展、また社会への奉仕に尽くされた方でした。

お寺にあっては、山門の改修、本堂屋根の吹き替え、庫裏の建築など境内が見違えるようになりました。そして、檀信徒教化のために心血を注いでこられました。

また、群馬県の保育園のトップとして群馬県保育協議会の会長や、晩年には瑞宝単光賞を受賞され、子どもたちや社会のために貢献して参りました。

このご葬儀にご会葬いただいた皆様は、このご縁につながる皆様であろうかと存じます。どうか、昭雄大和尚様のお心を受け止めていただき、それぞれの立場でいのちの継承をしていただければ、これに勝る供養はないと思います。

昭雄大和尚さまの生前のご交誼ご厚情に対しまして、深甚（しんじん）なる感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご法愛を賜りますようお願い申し上げ、ご無礼ながら御礼の言葉とさせていただきます。

瑞岩寺総代　葬儀委員長　青木恒一
瑞岩寺住職　長谷川俊道

お知らせ

◆podcast
『こまったときの聴き込み寺』
（毎週金曜日好評配信中！）

最近、いつコンビニに立ち寄りましたか？唐突な質問で困惑させてしまいましたね。普段の生活において、気軽にフラッと、もしくは何かが足りない時に近くのコンビニに立ち寄るのはよくある日常です。でも、こまった時、何か心に引っ掛かる悩みが生まれた時、あなたはどうしていますか？当番組は、群馬県・太田市にある瑞岩寺の住職・HASEさんの、実はコンビニの倍近くの数が存在するお寺に、何かあればフラッと立ち寄ってほしいをテーマに生まれました。「職場の上司と反りが合わず仕事が苦痛です」「子どもの好き嫌いが多くて困っています」「ミュージシャンへの夢を捨てきれず悩んでいます」「明日は初デート！どうしよう！！」etc。人には言えない悩みも、日常のささいな疑問もHASEさんにぶつけてみて下さい。何かと忙しく、悩み多い日々。お耳をお貸し下されば、少し疲れたそんな心をHASEさんがチクリとホンワカ癒やします。

【HASEへのご質問・お悩み相談は】
kikikomi@zuiganji.comまで
ペンネーム、年齢、性別とともにお寄せ下さい！
・iTunesでお聴きになる方には、
→https://itunes.apple.com/jp/podcast/komatta-shino-tingkikomi-si/id624486999?mt=2
・PCで直接聴取される方には、
→http://podcast5.kiqtas.jp/kikikomi/

すべての人に佛さまの智慧と慈悲を
宗教法人 慈眼山 瑞岩寺
群馬県太田市矢田堀町388
TEL：0276-37-1231／FAX：0276-37-5535
E-mail：info@zuiganji.com
Website：http://www.zuiganji.com
ブログ http://ameblo.jp/zuiganji/

◇御意見、御要望はいつでもお知らせ下さい。
◇お身体をお大切に、お健やかにお暮らしくださいませ。
◆み仏さまの御加護を心からお祈りいたします。　合掌